

卓ヶ洞の竜



馬引きの新太は、十二才。父親を助けてよく働く少年だ。

今日も、朝早くから、馬のたづなを引いて、となり村へ荷物を運びに出かけた。家のうらの山道を少し登ったとき、だけれかが、わめいているのが聞こえてきた。

「ひゃあつ。これは、どうしたことじゃ。

田んぼの水が、からっぽじゃが！」

近所の九助じいさんだ。

「きのうの夕方、しろかきをすませて、

水をはっておいだのに、すっかりひあがつているぞ。水ぬすつとはだれだ！」

向こうのおかの上からも、千吉さんがどなっている。

「おうい。みんな、来てみる。池の水がなくなったぞ。たいへんだ。これじゃ、田植えの水が足りないぞ！」

村人たちは、何ごとかと、次々に、おかけ上がった。

この山あいの田畑には、たのみのつなの、小さなため池の水が、どうしたことか、ひとばんのうちに、半分へってしまつたのだ。

「これじゃ、田植えができんのう。このからから天気じゃ、どうぶん雨はふりそうにもないし。」

「こまつたなあ。いったい、だれのしわざじゃろう。」

みんな、口々に、

「どうしたことだ。」「こまつた。」

と、うで組みして、ぶつくさ言っているばかりだ。

その日の夕方のこと、仕事の帰り道に、新太は、つかれた馬に水を飲ませてやろうと、池の土手にやってきた。

すると、池の水面から、きらきらと五色に光る大きな玉が、ころがるように出てきて、土手に上がり、山のおくへと、にげるように消えていった。

いっしゅんの出来事に、新太は、ぼうぜんとつつ立っていた。

辺りは、うす暗くなっていたが、あの、光る大きな玉がころがつていったあとが、光の帯のように、山のおくへと続いているのが、はつきりと見える。

「ありやあ、何だろう……。」

新太は、その光の帯にさそわれるように、馬を引いて山の中へ入って行った。うつそうとしげる森をぬけると、目の前に岩山が見えた。



「あつ。あの岩山は、卓ヶ洞にちがいない。」

ぎよつとして立ち止まった新太は、いちもくさんにもと来た道を、にげ帰った。

「卓ヶ洞は、深いほらあなでう。おそろしい竜が住んでおるんじゃぞ。」

と、新太のおじいさんが話してくれたのを、思い出したのだ。

「あの、池から上がってきた光る玉は、

竜だったのかも……。池の水や田の水がなくなったのは、竜が……。」

新太の話を聞いた村人たちは、すっかり、竜を水ぬすびと決めこんで、さっそく、竜をこらしめる相談を始めた。

そして、とうとう、卓ヶ洞の入り口に大きな石を積み上げ、大木でつかいばうをして、竜をとじこめてしまった。



それから三日ほどたった朝早く、新太は、ほらをのぞきに行った。

ほらの近くまでくると、うめき声が聞こえる。

ウォーン、ウォーン、グォーン、ググググ……。

悲しげな声で、

「水をくれ、水がほしい。きれいな水、水、水……。」

と言っているようだ。

新太は、積み重ねてある大きな石によじ登り、すき間から、こわごわのぞいてみた。真つ暗なほらのおくの方に、光るものが動いている。

新太は、わずかに岩からしみ出ているわき水を、かいばおけにためて、石のすき間から、そつと、流しこんでやった。

仕事の帰り道に、新太はまた、竜の様子をのぞきに行った。けさよりは静かな声だったが、まだ

「水がほしい……。水をくれ……。」
と、なっている。

新太は、竹のつつに入れて大切に持っていた自分の飲み水を、ほらの中に入れてやった。

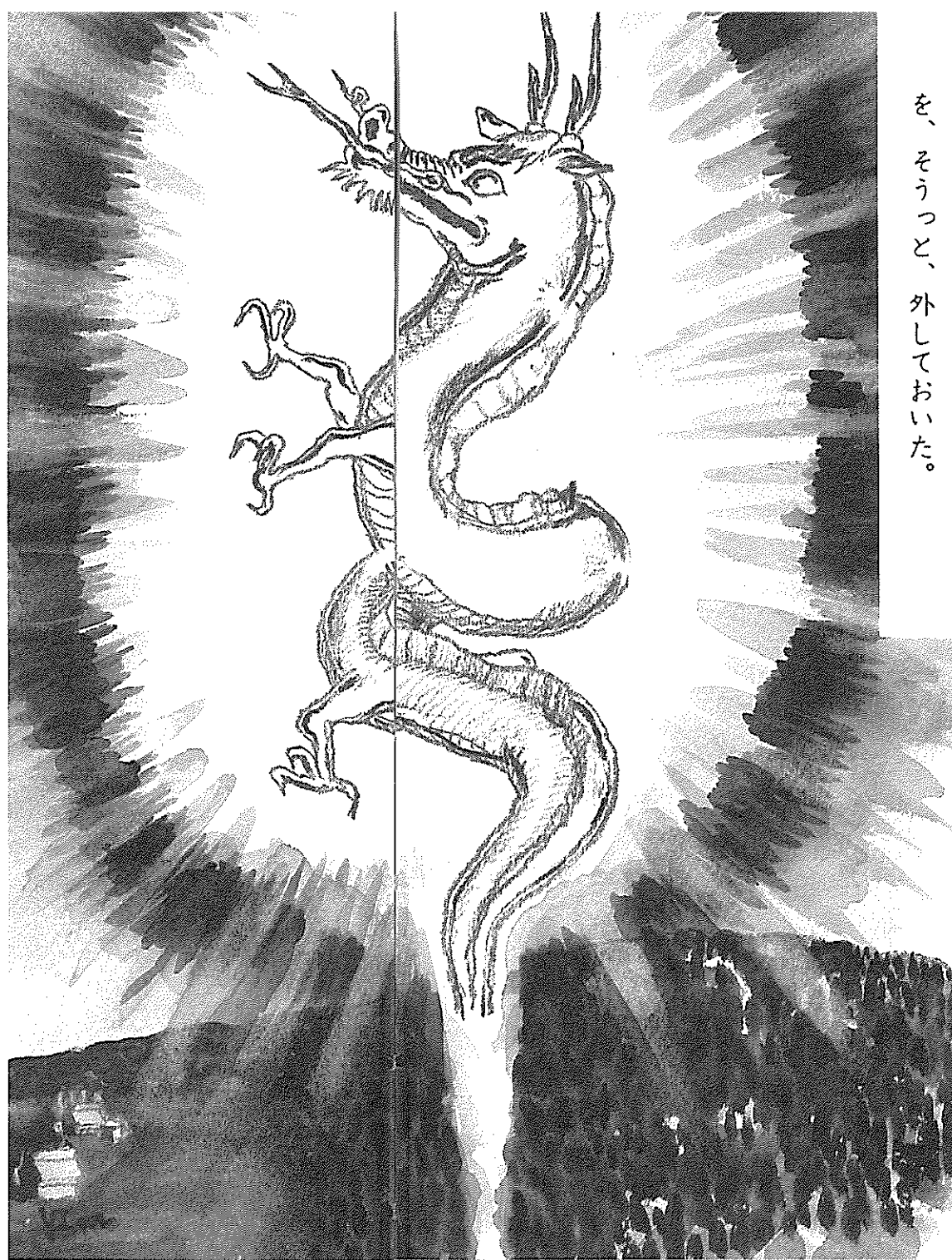
「水がなくて、すまんなあ。この山も、水がかれてしまつて、おまえにやる水もくめないんだ。村の人たちも、雨がふらなくてこまつているんだ。これでごまんしてくれ。」

新太は、ほらの入り口のつつかいぼうを、そうつと、外しておいた。

あくる朝のこと、新太が、仕事に出かけようと、朝日にかがやくおかを見上げたとき、とつぜん、白い雲がわき上がり、あの、きらきらと五色にかがやく竜が、空へ上っていくのが見えた。

「おお、竜が天に上っていく……。」

新太は、雲の行く手をじつと見つめていた。



ひと仕事すませた新太が、おかの上で馬に草を食べさせていると、急に辺りが暗くなり、ゴロゴロとかみなりが鳴りだした。

「おうい、雨雲がやってきたぞう。雨がふるぞう。」

村人たちのうれしそうな声が、おかの上まで聞こえてくる。

やがて、大つぶの雨がぱらぱらとふり始めたかと思うと、はげしい雨が、ザザザーツ、ゴーツ、ゴーツと、村の田畑を包んだ。

「きつと、あの竜が、雨をふらせてくれたのだ。」

新太は、たきのような雨に打たれながら、じつと空をあおいでいた。

それから、日照りが続くと、村の人们は、冷たくておいしい水を竹のつつに入れ、卓ヶ洞の前にそなえて、竜に雨ごいをした。

そして、雨にめぐまれ、ぶじに田植えがすむと、「馬の塔（おまんこ）」を出して、竜にお礼をする祭りをしたという。